

澤田 治 (2018 年度日本英語学会賞 (著書) 受賞)

この度は拙著 *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface* (Oxford University Press, 2018 年) に対して日本英語学会賞 (著書) を頂き、大変光栄に存じます。選考委員および事務局の先生方には、大変お忙しい中、貴重な時間を選考に充てて頂き、心よりお礼申し上げます。また本の内容に関して、大変有益なコメントもいただき、ありがたく思っております。

本書では、日英語の語用論的なスケール修飾語の意味・機能について意味論と語用論のインターフェースの観点から考察しました。本書でとりわけ注目した現象は、意味論レベルで使われるスケール修飾語が、語用論レベルでも使われるというスケールの「二重使用現象」です。本書では、比較表現、強調詞、最小化詞、反期待的スケール修飾語等、様々なスケール修飾語の二重使用現象を基に、意味論的なスケールの意味と語用論的なスケールの意味の間の共通点と相違点を考察し、両者は、「程度性」という概念を多次的に捉えることで統一的に分析することが可能であると主張しました。語用論的スケール修飾語は、発話状況に対する話し手の評価や発話行為のやわらげ、当該発話の重要性などをシグナルする際に重要な働きをしますが、これらの語用論的なスケール現象も意味論的なスケール現象と同様のスケール構造を持っており、形式意味論的な分析が可能であることを示した点が本書の特徴的な点だと考えております。

本書の基となったものは、2010 年にシカゴ大学に提出した博士論文ですが、在学中に指導いただいた先生方、とりわけ *dissertation committee* の Chris Kennedy 先生、Anastasia Giannakidou 先生、Karlos Arregi 先生、Chris Potts 先生に改めて感謝申し上げます。

本書では、埋め込み文における語用論的スケール修飾語の解釈やスケール表現の意味変化など博士論文では扱わなかったトピックについても考察しましたが、これらの内容および関連したトピックについては、CLS、DGfS、日本英語学会、LENLS、LSA、Triple A、東海意味論研究会、モダリティワークショップやシカゴ大学、Göttingen 大学、関西外国語大学、京都大学、南山大学、三重大学での研究会、ワークショップで発表・ディスカッションをさせていただく機会に恵まれました。有益なフィードバック、コメントを頂いた皆様に深く感謝申し上げます。また、現象面・理論面に関して継続的に非常に有意義なディスカッションをさせていただいた Thomas Grano 氏、久保進先生、窪田悠介氏、Elin McCready 氏、澤田治美氏、澤田淳氏、およびサポート頂いた勤務先の皆様、家族にも深く感謝いたします。

まだまだ研究者として不勉強な点が多々ありますが、今後も少しでも研究の発展に貢献できるよう、精進していきたいと思っております。この度は、誠にありがとうございました。